

## 6月29日（月）サムエル記第二18章6～15節

「ヨアブは、「こうしておまえとぐずぐずしてはいられない」と言って、手に三本の槍を取り、まだ樫の木の真ん中に引っ掛かったまま生きていたアブサロムの心臓を突き通した。」（14節）

---

6節の「兵たち」とはダビデの側の兵たちで、イスラエルとはアブサロム軍のことです。両者の戦いがエフライムの森で行われることとなりました。その結果は7節に「イスラエルの兵たちは、そこでダビデの家来たちに打ち負かされ、その日その場所で多くの者が倒れ、その数は二万人となった」と記されています。恐らくダビデたちは、森に覆われた地形を熟知し、その地形をどのように生かして戦うか綿密に作戦を練ったのではないかと思います。それがダビデ側の大勝利につながったのでしょう。8節の「戦いはこの地一帯に広がり」とは、アブサロムの軍が散り散りになってしまった様子を表現していて、兵たちの中には自分がどこにいるのか分からなくなってしまった者もいたのではないかと思います。こうなっては戦いどころではなかったことでしょう。「この日、剣よりも密林のほうが多くのを食い尽くした」との表現からもそのことがよく分かります。このエフライムの森でのダビデの大勝利の背後には、勝利へと導かれた主の働きがあったことを思います。

アブサロム自身も混乱した中であつたことでしょう。戦いの最中に敵であるダビデの家来たちに出会います。らばが大きな樫の木の。茂った枝の下を通った時に、頭が樫の木に引っかかり、アブサロムは宙づりになってしまいました。アブサロムは、このようなかたちで醜態をさらすこととなりました。10節でそのことがヨアブに報告されると、ヨアブは「いったい、おまえはそれを見ていて、なぜその場で地に打ち落とさなかったのか。私はおまえに銀十枚と帯一本を与えたのに」と言いますが、そのヨアブにその男は、銀十枚どころか銀千枚をもらっても、アブサロムに手を下せないと言います。その理由は、5節でダビデが息子アブサロムをゆるやかに扱ってくれと言っていたのを聞いていたからです。しかし、ヨアブはその言葉に耳を貸そうとせず、樫の木の真ん中に引っ掛かっていたアブサロムの心臓を槍で突き刺しました。ここで疑問となるのは、なぜヨアブはダビデの命令に背くかたちでアブサロムを殺してしまったのかということです。まず一つが、ダビデは息子に甘すぎるといった可能性はあります。それとともに、アブサロムはダビデの息子である前に、自分たちの敵であり、謀反人でした。ですからヨアブからすれば、当然見つけ次第殺すべきだと思ったのではないのでしょうか。いずれにしても、アブサロムは、人生において惨めな最期を迎えることとなりました。時を待つことをせず、自分で王になろうとしたアブサロムを神ご自身が低くされたのです。なぜなら神は自分を高くする者を低くし、自分を低くする者を高くされるお方だからです。

## 6月30日（火）サムエル記第二18章16～18節

「アブサロムは生きていた間、王の谷に自分のために一本の柱を立てていた。「私の名を覚えてくれる息子が私にはいないから」と言っていたからである。彼はその柱に自分の名をつけていた。それは、アブサロムの記念碑と呼ばれた。今日もそうである。」（18節）

---

昨日のアブサロムの最期を見れば、彼は完全に人生の方向性を間違えていたと言わざるを得ません。私たちも主の目から見て、間違った方向に人生の歩みを進めていることはないでしょうか。そのような人生を歩んでいては何の意味もありません。

ヨアブが角笛を吹き鳴らしたのは、アブサロムを打ち取ったことによる戦いの終了を告知させるためでした。それで兵たちはイスラエルを追うのをやめて帰って来ました。17節で「彼らはアブサロムを取り降ろし、森の中の深い穴に投げ込み、その上に非常に大きな石塚を積み上げた。」とありますが、アブサロムを墓に葬ったということです。その目印になるのは、大きな石塚だけでした、アブサロムは生きていた間、王の谷に自分の存在を示す目的で、一本の柱を立てていました。「私の名を覚えてくれる息子がいないから」と言っていたからです。アブサロムに息子がいないということにつきましては14章27節と矛盾するのではないかと議論がありますが、もしかするとその三人の息子と一人の娘も幼少期に亡くなったと推測されています。彼は一本の柱に自分の名をつけ、それはアブサロムの記念碑と呼ばれました。

多くの人は、世に自分の名を残そうと日夜努力しています。私たちもさまざまなところに自分の名を残そうとするかもしれません。しかし、世にあっても何も残すことができなかったとしても、主が私たちと私たちが地上でなしたわざを永遠に覚えていてくださいます、何という恵みでしょうか。私たちに信仰が与えられた幸いはこのようなところにもあります。

## 7月1日（水）サムエル記第二18章19～23節

「しかし、どんなことがあっても、走って行きたいのです。」（23節）

---

ツアドクの子アヒマツは、ダビデにフシャイからの伝言を伝えた一人で、そのことが17章15～21節に記されています。恐らく、彼はそのままダビデ軍の一員としてヨアブの部隊に配属され、戦いに出ていたのでしょう。そのアヒマツは、主が敵の手から王を救ったことと王のために正しいさばきをされたことを伝えるための伝令になることを願い出ました。しかし20節でヨアブは、彼を引き止めます。王子のアブサロムが死んだことを合わせて伝えなければなりませんから、それを喜びとして王が受けとめるかどうか分からなかったからです。21節

で、ヨアブは、クシュ人を伝令に送ります。しかし、なおもアヒマツは、「どんなことがあっても、やはり私もクシュ人の後を追って走って行きたいのです。」と言います。それに対してヨアブは「知らせに対して何のほうびも得られないのに」と言い、ここにアヒマツではなくクシュ人を行かせた理由が明らかになります。ほうびも得られないどころか、王の命令に背いてアブサロムの命を奪ったことによりアヒマツには命の危険すらありました。1章でサウルとヨナタンの死を知らせた若い者を殺し、4章を見ますと、イシュ・ボシェテを殺したバアナとレカブも殺したことからも、命の危険を感じざるを得ませんでした。それでも、アヒマツは、「しかし、どんなことがあっても、走って行きたいのです。」と言い、意思を変えようとしないうアヒマツにヨアブも「走って行け」と言いました。すると、アヒマツはクシュ人を追い越すほどに、急いでダビデのもとへ向かったのです。

アヒマツの行動の動機は、主がなさったことを伝えるということであり、ヨアブの動機はダビデの命令に背いて、アブサロムを殺してしまったということでした。私たちも主がなされたとの確信があれば、それを喜びをもって伝えられることができますし、急いで伝えたいとの気持ちにさせられることでしょう。私たちの行動の動機は、どこにあるでしょうか。

## 7月2日(木) サムエル記第二18章24～33節

**「わが子アブサロム。わが子、わが子アブサロムよ。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブサロム。わが子よ、わが子よ。」(33節)**

---

ダビデは、内門と外門の間に座り、城壁の上の塔にいた見張りの者が逐一見分けられるものをダビデに報告していました。そして、ただ一人で走って来る男のことを見張りが王に王声で告げると、「ただ一人なら、吉報だろう」と言います。しかし26節で見張りの者は、走って来る別の男の存在を告げます。一人なら伝令で、複数であれば命からがら逃げ帰ってきた敗残兵の可能性があります。ダビデは自分に言い聞かせるように、「それも吉報を持って来ているのだろう」と言います。だんだん走って来る者が近づいてくると、最初の者がアヒマツのように見えてまいりました。それに対してダビデは、「あれは良い男だ。良い知らせを持って来るだろう。」と言ったのです。アヒマツは、王のもとに来て「平安がありますように」と叫び、地にひれ伏し、王に礼をして、「主は、王様に手向かった者どもを引き渡してくださいました。」と、主によってアブサロム軍に大勝利したことを報告しました。しかし、王は、ともに主が与えてくださったわが軍に対する勝利をともに喜ぶよりも、「若者アブサロムは無事か」とアブサロムの身を案じました。アヒマツはどう答えてよいか分からなかったのでしょうか。そのままアブサロム

の死を伝えることをためらいました。彼のあいまいな答えは、ダビデの不安を増し加えることとなりました。その後に王のもとにきたクシュ人が、「主は、今日、あなた様に立ち向かうすべての者の手から、あなた様を救って、あなた様のために正しいさばきをされました。」と勝利を告知しましたが、ダビデは今回も勝利をとともに喜ぶことなく、「若者アブサロムは無事か」とアブサロムの安否を尋ねます。クシュ人は「王様の敵、あなた様に立ち向かって害を加えようとする者はみな、あの若者のようになりますように。」と、死とかアブサロムという言葉を使ってはいませんが、ダビデにはアブサロムの身に何が起こったのか理解したのでしょうか。「わが子アブサロム。わが子、わが子アブサロムよ。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブサロム。わが子よ、わが子よ。」と、アブサロムの死を嘆き悲しみました。

結局ダビデは、アムノンに続いてアブサロムまで失いました。このことについて、ダビデの姦淫の罪と結びつけようとする人がありますが、むしろ私はアブサロムという野心的でわがままであった若者を主に従うようにきちんと教育できなかったダビデに問題があるように思います。もちろん、バテシェバとの姦淫の罪を犯したことは間違いありませんが、それが弱みとなって子どもに言うべきことを言えなかったことに問題があったと言えます。「若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない。」(箴言22章6節) ここで言う「行く道」とは、主に従うことです。主に従うように子どもたちを教育していますか。後になって道を外れた時に、ダビデのように後悔しないようにしましょう。

## 7月3日(金) サムエル記第二19章1～8節

「さあ今、立って外に行き、あなたの家来たちの心に語ってください。私は主によって誓います。あなたが外においでにならなければ、今夜、だれ一人あなたのそばにとどまらないでしょう。そうなれば、そのわざわざいは、あなたの幼いころから今に至るまでにあなたに降りかかった、どんなわざわざよりもひどいものとなるでしょう。」(7節)

---

ヨアブのもとに、「今、王は泣いて、アブサロムのために喪に服しておられる」との知らせがありました。すると、その日の勝利は、すべての兵たちの嘆きとなりました。そして、アブサロムが殺されたことによって責任を問われかねないということになり、まるで自分たちがダビデに謀反を起こしたかのように感じられたかもしれません。ですから、兵たちは戦いにおける勝利の喜びを分かち合うこともなく、町にこっそりと帰って来ました。その時にダビデは顔をおおい、大声で、「わが子アブサロム、アブサロムよ。わが子よ、わが子よ。」と叫んでいました。人々は、あらためてダビデにとってアブサロムはダビデに謀反を企てた敵というよりも、ダビ

デの愛する息子であることを思わされたことでしょう。ヨアブは、抗議のためにダビデのもとに行きました。ダビデが息子アブサロムのために嘆いたことは別に驚くべきことではなかったと思われますが、勝利を取めた兵士たちに何のねぎらいの言葉もないということは、軍の長としては受け入れられないことでした。5節で、ダビデが勝利を祝うよりもアブサロムの死を嘆き悲しんだことで、自分たちは人々の前で恥をかかせられたと言い、6節では、「あなたは、あなたを憎む者を愛し、あなたを愛する者を憎まれるからです」と言い、敵であったアブサロムに比べれば、自分たちは取るに足らないものであり、仮に自分たちが全員死んで、アブサロムが生きていれば、そのことのほうがダビデの目にかなったことだと言い、7節で外に出て、民に語りかけるように促します。そうしなければ兵たちの心はダビデから離れてしまうと言います。

ヨアブの言うことはもっとものように思えます。恐らくこれを聞いた人は皆同意することでしょう。しかし、ヨアブを始めダビデの兵たちは、息子アブサロムを失ったダビデの悲しみや心の痛みを理解すべきでした。私も気をつけなければならないいつも思っていますが、私たちは正論で人に行動を促そうとしたり、間違いを正そうとしたりすることがあります。しかし、ダビデのように愛する人を失うことで心に痛みを抱えていたり、悲しみに押しつぶされそうになってそうできない人もいるはずです。人に語る前に、その人の置かれている状況等を理解し、その人に慰めの言葉をかけてから、本来なすべきことを教えても遅すぎることはないでしょう。そして、性急に行動を促すのではなく、その人が立ち直るように慰め、励まし、祈ることも大切であり、そのようなかたちで周りの兄弟姉妹に愛を示す者でありたいと思わされます。

## 7月4日(土) サムエル記第二19章9～15節

**「あなたがたは、私の兄弟、私の骨肉だ。なぜ王を連れ戻すのをいつまでもためらっているのか。」(12節)**

---

アブサロムの死後、イスラエルの全部族の間で争いが起こります。9節の王とはダビデのこと、ダビデは敵の手から自分たちを救い出し、士師の時代からイスラエルの最大の敵であり課題であったペリシテ人の手から自分たちを助け出してくださったのはダビデ王だ、ところが、そのダビデ王がアブサロムのいるところから国外に逃げておられると言います。10節で自分たちが油注いで王としたアブサロムは死んでしまい、統治する王がいない状態なのだから、「あなたがたはダビデ王を再びエルサレムに連れ戻すために、なぜ何もしないでいるのか」いや、何とかすべきだということです。もちろんだビデもエルサレムの王宮に戻りたいと思っていた

ことでしょう。そこで、まずは祭司ツアドクとエブヤタルに人を遣わし、ユダの長老たちへのメッセージを授けます。そもそもアブサロムはユダを中心に王となりました。ですから、もしイスラエルの北部からダビデの帰還の話が出てしまいますと、王室における彼らの立場がさらに強くなり、アブサロムを擁立したというだけで引け目を感じているユダの人たちの立場が、ますます悪くなりかねませんので、ダビデはユダの方からダビデ帰還の話を進めようとしたのです。12節でダビデは、アブサロムの擁立に動いて、ダビデに反旗を翻したユダの民に対しても「あなたがたは、私の兄弟、私の骨肉だ」と言います。これは、非常に親しい関係であることを強調した表現で、アブサロム擁立によりダビデを裏切ったユダの民をもダビデは「あなたがたは私の兄弟、私の骨肉だ」と呼び、すべてを赦すことで、イスラエル全体をもう一度一つにしようとしたのです。教会は、赦しにより常に一つとされるべきです。主イエスキリストの十字架上での血の贖いにより、互いに「あなたは私の兄弟、私の骨肉だ」と呼び合い、互いに受け入れ合うことが必要なのです。

さらに、アマサにも祭司ツアドクとエブヤタルを遣わし、ヨアブに代わって軍の長にしようとしています。このアマサは、ダビデの甥で、アブサロムの軍の長として謀反に加わった人物です。(17章25節参照) アブサロムに組して軍の長まで務めていた者に対してもダビデは和解の手を差し伸べようとしてしました。ダビデの寛容な心を見る思いがしますし、実際に14節では「すべてのユダの人々は、あたかも一人の人のように心を動かされた」とあります。そしてダビデの言ったとおりに、ユダの民はダビデのもとに人を遣わし「あなたも家来たちもみな、お帰りください。」と言わせました。王が帰途につき、ヨルダン川まで来ると、ユダの人々は、王を迎えてヨルダン川を渡らせるためにギルガルに来ました。

教会において大切なことは寛容さであり、赦しです。教会は、赦しにより常に一つとされるべきです。主イエスキリストの十字架上での血の贖いにより、互いに「あなたは私の兄弟、私の骨肉だ」と呼び合い、互いに受け入れ合う関係を築いてまいりましょう。

## 7月5日(日) サムエル記第二19章16～30節

**「王はシムイに言った。「あなたは死ぬことはない。」王は彼にそう誓った。」(23節)**

---

ヨルダン川まで来たダビデに、川を渡らせようとユダの人々がギルガルまで来ましたが、そのうちの一人のシムイが、ダビデ王を迎えようと急いでユダの人々と一緒にやって来ました。このシムイは、ダビデがアブサロムの謀反から逃れようとエルサレムから非難した時に、ダビデを呪った人です。(16章5～14節) 17節で「彼は千人のベニヤミン人を連れていた。」と

ありますが、その中にはサウルの家のもべで、ダビデがメフィボシェテの世話をさせていたツィバも十五人の息子と二十人の召使いを連れて、王が見ている前でヨルダン川に駆けつけ、今度は「王の家族を渡らせるため、また王の目にかなうことをするために、渡しを整え」しました。今度はというのは、16章1～4節でも現れていたからです。19、20節でシムイは、自分がダビデを呪った罪を罰しないようにと懇願します。それに対してツェルヤの子アビシャイは、「シムイは、主に油を注がれた方を呪ったので、そのために死に値するではありませんか。」と言いますが、22節でダビデはアビシャイをたしなめつつ、23節で「あなたは死ぬことはない」と赦しを宣言されました。私たちも、罪の悔い改めを確かに主が受け入れてくださり、私たちに罪の赦しを与えてくださいます。願わくば、すべてのご存じの主が受け入れてくださる、心からの真実な罪の悔い改めをささげたいと思わされます。

24節からは、サウルの子孫のメフィボシェテが出てまいります。メフィボシェテの身なりを見ると、誰からもお世話をされていなかった印象を受けます。25節で「メフィボシェテよ。あなたはなぜ、私とともに来なかったのか」と問うダビデに、メフィボシェテは家来であるツィバがたぶらかしたからだと言います。これにより16章1～4節でツィバが言ったことはすべて偽りであったことが分かります。ツィバに与えると言ったものを再び取り上げてメフィボシェテに与えるということは言えないダビデは、あなたとツィバで地所を分けるように言います。本来であれば、ツィバに与えられたものはすべて自分のものだと言ってもよさそうなのですが、メフィボシェテは「彼が全部取ってもかまいません」と言います。何という謙遜さかと思わされます。それとともに、28節でメフィボシェテは、ダビデから受けた恩恵を決して忘れることはありませんでした。メフィボシェテのように、私たちも主から受けた恵みを忘れない者でありたいと思わされます。